

モノローグとしてのダイアローグ — 『こころ』をめぐって

増田 裕美子

—

『こころ』は夏目漱石の代表作として取り上げられることの多い作品だが、その特異さについては充分注目され論議されてきたと言い難い。その特異さの一つは、主要な登場人物に名前がないということである。かろうじて「先生」の奥さんに「静」という名前が与えられているが、「先生」「私」そしてKというように、主要人物である三人の男たちには具体的な名前がないのである。

漱石の処女作『吾輩は猫である』は、「吾輩は猫である。名前はまだ無い。」¹という有名な書き出しで始まるが、ここにすでに現れているように、漱石は名前に対して非常に意識的であった。『吾輩は猫である』という作品自体、名前をめぐる長大な言説ととらえられなくもない。それは語り手の猫に名前がないことも含めて、登場人物それぞれの名前に単なる記号ではない、意味が持たされているからである。たとえば、実業家の金田君は、その名前の通り、何につけても金に物を言わせる金の権化であり、娘の名前までもが富子という。この作品が諷刺的であるのは、こうした名前の付け方にすでに諷刺が込められているからであって、古閑章の言うように、珍野苦沙弥や迷亭といった名前にしても、

書齋に閉じ籠っていつも鼻毛を抜いてくしゃみをしていそうな主人のとぼけた風貌と、これまた酒に酩酊したような論理や駄洒落を連発して人をけむに巻く美学者の存在感とは、この奇抜な名称によって巧ま²ず²に表象されているのである。

また漱石はこの作品の中で自分までも諷刺の対象にしており、漱石という名前を同じ読みの「送籍」として、過去に徴兵忌避のため自分の戸籍を北海道へ移籍したことを自ら揶揄しながら、次のように越智東風に語らせる。

先達でも私の友人で送籍と云ふ男が一夜といふ短篇を書きましたが、誰が読んでも朦朧として取り留めがつかないので、当人に逢つて篤と主意のある所を糺して見たのですが当人もそんな事は知らないよと云つて取り合はないのです。

苦沙弥も「随分妙な男ですね」といい、迷亭も「馬鹿だよ」と言い放つ。

猫に名前がない点については、すでに多くの人々が論じているが、ここでは、無名であることが単なる一人称の語り手、あるいは観察者、批評家であるからという説明だけでは片付かない側面があると指摘しておきたい。前述したように名前をめぐる言説と見なされうるこの作品において、猫の無名性にはかなり積極的な意味合いが持たされている。たとえば第一章は「名前はまだつけて呉れないが（中略）生涯此教師の家で無名の猫で終る積りだ。」という文章でしめくくられているが、この「無名の猫」という言い方には、ただ単に名前が無いという意味だけではなく、世間に知られていない、「有名」ではない猫という意味も含まれていると考えられる。逆説的にもこの作品によって「無名の猫」は日本で最もよく知られた「有名な」猫となるわけで、名前がないことは逆に他のどんな名前よりもその存在を際立たせる。だからこそ猫は三毛子の家の

下女が自分のことを「野良」と言うのを聞いて、「吾輩は名前はないと屢しばしばば断つて置くのに、此下女は野良——と吾輩を呼ぶ。失敬な奴だ。」と憤るのである。

この下女のこと述べられている第二章には、バルザックが小説中の人間の名をつけるのにパリ中を朝から晩まで歩き回つて、ようやくある裁縫屋の看板にマーカスという名を見つけてその名にした、という逸話が語られ、「随分手数のかゝる話だ」と猫は批判めいた口調で言う。小説家漱石はバルザックのように「どうも自分で作つた名はうまくつけた積りでも何となく故意わざとらしい所があつて面白くない」とは考えない。それこそ故意とらしい名前を登場人物につけて小説の意図を暗示させる手助けとする。それが一番明確に現れているのが『吾輩は猫である』であり、同じ滑稽・諷刺の趣を持つ『坊っちゃん』である。

『坊っちゃん』の場合、本名ではなくあだ名によつて登場人物の特質が表されるが、そもそもあだ名とはそのような機能を持つものである。「坊っちゃん」というあだ名について見れば、二種の感情で呼ばれている。「ひとつは清が敬愛の意味をこめて呼びかける呼称であり、もうひとつは野だが軽侮の意味で噂する呼称である。」⁽⁴⁾ いずれにしても、清が「あなたは眞つ直でよい御気性だ」と誉める主人公の語り手のような、「正直な純粋な人を見ると、坊ちやんだの小僧だのと難癖をつけて軽蔑する」社会を描き出すことが、この小説の意図にあるならば、「坊っちゃん」の本名を明かすことは無益であり、無駄なことであろう。だからこそ作者漱石は坊っちゃんに「是でも歴然とした姓もあり名もある」と語らせながら、本名を名乗らせないのである。

あだ名で満ち溢れるこの小説で唯一本名だけで呼ばれる主要人物が清である。しかし清という名前にも、単なる名称ではなく、この人物にふさわしい意味が込められている。清は「あなたは慾がすくなくつて、心が奇麗だ」と坊っちゃんを誉めるが、坊っちゃんが「清が賞めてくれる意味で「坊っちゃん」たる自分を自認」⁽⁵⁾するには「自分を賞めてくれる清自身の「心の奇麗さ」の発見が必要だつた。」⁽⁷⁾ すなわちバツタ事件が起つた夜、床の中で坊っちゃんは清のことを「人間としては頗ずぶる

尊とい。(中略)清はおれの事を慾がなくて、真直な気性だと云つて、ほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人の方が立派な人間だ」と認識するのである。「清」という名前は「心の奇麗さ」を持つ人間にこの上なくふさわしい名前だと言える。

しかし清という名前にはもう一つの意味合いが隠されていることも付け加えておきたい。清は坊っちゃんを非常にかわいがり、母親のような愛情を注いでくれる。坊っちゃんも、最初は「子供心になぜあんなに可愛がるのかと不審に思つた」ものの、のちには「年寄を見ると何だか懐かしい心持ちがする。大方清がすきだから、其魂が方々の御婆さんに乗り移るんだらう」と言うごとく、清に対する愛情を表明する。そして清からの手紙を心待ちにしていることを、下宿の婆さんに奥さんからの便りを待つっていると誤解されても、あえて否定しない。さらに清は死ぬ間際に「御墓のなかで坊っちゃん comes のを楽しみに待つて居ります」と偕老同穴の契りを思わせるような言葉を口にする。このように清には恋人や妻のイメージが仮託されており、⁸⁾そのことは漱石が妻鏡子の戸籍上の名前である「キヨ」を連想させる名前をつけたことと関連している。いずれにしても清という名前は、「不浄の地」と対比されて、坊っちゃんが帰るべき場所を指し示す指標としての機能を果たしていると言える。

ところで、名前がそのものの本来の性質を表していることを「名詮自性」といい、曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』の登場人物の名前は、「名詮自性」の考えに沿つて名づけられている。たとえば伏姫の場合、「伏」は人偏に犬と書くので、犬と結婚する人間にふさわしい名前である。八犬士もそれぞれ「犬塚」「犬川」のように名字に犬が含まれる。このような江戸文芸の特性をむろん漱石は知っており、「名詮自性」を自分の作品にも生かしていると思われる。「近代化した馬琴」と正宗白鳥に批判された『虞美人草』においても、ヒロインの藤尾という名前に隠された意味があることはすでに論じたところである。¹⁰⁾とすれば、ますます『こころ』の主要人物三人に固有の名前がないことは奇異に見える。名前がないことがいかに奇異で不自然かは、一九五五年に映画化された『こころ』(市川崑監督、猪俣勝人・長谷部慶次脚本)で、「先生」に「野淵」、K

に「梶」、「私」に「日置」という名字がつけられていることから納得されよう。三人の男たちが織り成すドラマである以上、この男たちに何らかの名前があるのが自然なのである。

ここで「先生」の奥さんの「静」という名前について見てみよう。奥さんは、男同士のコミュニケーションから排除されているという議論があるように、コミュニケーションする声を封じられている。その意味でいかにも「静」という名前は奥さんにふさわしい。さらには「先生」は、明治天皇の崩御の際、生き残っているのは時勢遅れだと感じてそう言ったら、奥さんに「殉死でもしたら可からう」と言われる。そして一ヶ月ほどのちに乃木大将の殉死の報に接して、それに促されるように自殺を決意するが、乃木大将の奥さんの名前がまさしく「静（子）」なのである。おそらく当時の読者に、乃木大将とともに殉死した妻静（子）の名前は鮮明に記憶されているであろうし、その点を考慮せずに漱石が「先生」の奥さんを「静」と名づけることはしないであろう。

このように周到な考えのもとに、人物の名前をつける漱石が、なぜ『こころ』の男たちに名前をつけないのかは、やはり大きな問題として立ち現れてくるのである。

二

『こころ』の英訳者エドウィン・マクレランは、主要人物たちに名前がないことについて、『こころ』が一種のアレゴリー（寓話）として書かれたのではないかと述べている。また越智治雄は、『こころ』の登場人物たちの固有の名前が明かされないことに抽象化の傾向をみており、人物の外貌がほとんど描写されていない点も合わせて指摘している。このような議論からも明らかのように、『こころ』は、登場人物の具体的な性格や特徴が明確な、『吾輩は猫である』や『坊っちゃん』や『虞美人草』などは別種の作品であると言える。

しかし『「ところ」の登場人物たちはいかに具体的な特徴を欠いていようと、現実離れた存在ではない。越智治雄が言う「内面の実在感」⁽⁴⁾を読者は感じ取るはずである。そこで考えてみたいのが、「私」という語り手の自称である。

「私」は単に語り手自身を指す一人称の言葉ではない。一人称には他にも「我（吾）輩」「おれ」「余」「われ」などいくつもの言葉がある。そうした中で漱石が『「ところ」の語り手に「私」という自称を名乗らせるにはやはり何らかの意図がある。

「私」はもともと「公」に対する言葉である。「公」が世間や社会を指すのに対し、「私」は自分個人のことを指す。そして「公」が表立ったことを意味するのに対し、「私」は表ざたにしない、秘密のことを意味する。さらに「公」が公正で私心のないことを意味するのに対し、「私」は私利私欲のような悪い意味に使われ得る。『「ところ」は、大学生だった「私」が「先生」と出会い、「先生」の秘密を遺書という形で知る話であり、その遺書には「先生」が自分の利益のために友人を裏切った顛末が書かれている。そしてその遺書では、「先生」もまた「私」という自称で語っているのである。

『「ところ」は二重の「私」が物語る、本来的な意味での「私」小説である。いわゆる「私小説」と呼ばれる、自分の身辺などを綴りながら自分の心境を語っていくというものではない。「私」、すなわち自分の、隠されている内面——それがとりもなおさず作品の題名ともなっている「ところ」であろう——を、そこに人には知られたくない部分があるとうと、さらけ出して見せた作品なのである。

そこでまず注目しなければならないのが、「下 先生と遺書」で語り、かつ語られる「先生」の「私」である。

「下 先生と遺書」は、「先生」である「私」が大学生の「私」に、「あなた」という二人称の呼称を用いて語りかけるところから始まる。ここでは「先生」である「私」が自分をどうすれば良いのか思い煩っていて、「此儘人間の中に取り残されたミイラのように存在して行かうか、それとも……」と自問自答していることが語られる。「それとも……」の後には言葉が途切れてはいるが、後に語られるように、死を意識していることは明らかである。

この、自分自身に考えを集中し、自問自答している姿が、この遺書全体を貫いている「先生」である「私」の基本的な姿勢である。そのことは、最初に語られる両親の死の場面で、母が今わの際に言った言葉について、果たしてそれが遺言だったのかどうかという疑問を述べながら、「斯ういふ風に物を解きほどこいて見たり、又ぐる／＼廻して眺めたりする癖」がその頃からあつて、後年の苦悩に力を添えることになった、という記述からもうかがえる。

続いて語られる叔父との確執の経緯についても、叔父一家のそれまでとは違う態度に心づいて、「私の性分として考へずにはゐられなくなり」、とうとう父母の財産について叔父と話をした結果、財産を相当横取りされたことがわかる。残った財産を処分し、生活するには不自由のないお金を持つて東京で新たに住居を探して、母娘の家に下宿することになるが、この母娘との関係においてもまた、「先生」である「私」は様々に心の中で自問自答する。最初は疑い深く観察していたのに、そのことを「奥さん」が全く口にせず、自分を鷹揚だと評してくれるようになって、自分の心が落ち着いてくると、「奥さん」は「わざと私をそんな風に取り扱つて呉れたものとも思はれ」るし、「実際私を鷹揚だと観察してゐたのかも知れず、「奥さん」の方で誤魔化されてゐたのかも解」らないなどと、あれこれと考えをめぐらす。

母娘とのかかわりが親密になっていくうちに、「先生」はまた「奥さん」の態度に思いをめぐらすようになる。「奥さん」は自分の娘と「私」とを接近させたがつていいのか、あるいは「私」を暗に警戒しているのか、と。結局はどちらも「奥さん」の本当の態度であつて、矛盾するものではないことに気づく。しかし、「奥さん」の求めに応じて、これまでの事情をすべて話した「先生」は、最初こそ「奥さん」たちの反応に満足したものの、また「奥さん」のことを疑り始める。「叔父と同じやうな意味で、御嬢さんを私に接近させやうと力めるのではないかと」。

すでに「御嬢さん」に対して「信仰に近い愛」を抱いていた「先生」だが、「奥さん」が「狡猾な策略家」に見えてくると、「奥さんと同じやうに御嬢さんも策略家ではなからうか」という疑念が起る。「二人が私の背後で打ち合せをした上、万事を遣つてゐるのだらう」と思うのである。愛と疑念との間で苦しむ「先生」は、「御嬢さん」を嫁に貰いたいという話を

言い出せないまま、友人のKを家に引つ張り込むことになる。

Kはもう一人の「先生」と言うべき存在である。それほど両者には著しい共通性が見られる。まず二人は同郷の幼馴染である。Kは医者の家へ養子に行ったが、生家も養家も裕福な家であり、この点でも「先生」の家と同様である。二人はその後相前後して東京に出て、同じ下宿に入る。同じ部屋に二人で寝起きし、「山で生捕られた動物が、檻の中で抱き合ひながら、外を眺めるやう」に暮らしていた。二人は同じ科に入學し、三年目の夏に二人とも運命が変転する。「先生」は叔父との軋轢で、またKは養家に医者になる勉強をしていないという事実を打ち明けて、復籍した実家からも勘当され、いずれも故郷と訣別する。

「先生」がKを家に連れてきて住ませるのも、自分と同じ体験をさせるためである。「氷を日向へ出して溶かす」ように「奥さん」から取り扱われて快活になった「先生」は、「今それをKのために応用しやうと」したのであり、「私の神経が此家庭に入つてから多少角が取れた如く、Kの心も此所に置けば何時か沈まる事があるだらうと考へた」のである。Kを「人間らしくする第一の手段として、まず異性の傍に彼を坐らせ」、「其所から出る空気に彼を曝した上、錆び付きかゝつた彼の血液を新しくしやうと」した「先生」の試みは次第に成功し、「今迄書物で城壁をきづいて其中に立て籠つてゐたやうなKの心が、段々打ち解けて来る」。そして「御嬢さん」とKが二人きりであるところを目撃して、「先生」が嫉妬を感じるほど、Kは家の者たちと親しくなっていく。

しかし「先生」は逆に神経が過敏になつていく。「御嬢さん」のことでKに対して不審の念がわいているからである。「先生」は「Kと私は何でも話し合へる中でした」と言いながら、自分が「御嬢さん」を愛していることをなかなかKに言い出せないでいる。房総へ旅行に行った折も、せっかくの良い機会を得ながら、「人間らしい」という抽象的な言葉で議論をしまし、肝心な話を打ち明けられない。

そして十一月のある寒い日、雨上りに往来へ出た「先生」はぬかるみの道で、「御嬢さん」と連れ立ったKと出会う。こ

の事件があつて「先生」は「奥さん」に思い切つて「御嬢さん」を貰いたいという話をしようかと考え出す。しかし今度は、「御嬢さん」がKのほうに意があるのではないかという疑念にとらえられ、「御嬢さん」の意を確かめることもままならず、何の行動もとれずに「立ち竦んで」しまふ。その後、年が改まつたある日、「先生」はKの口から「御嬢さん」に対する切ない恋を打ち明けられるのであるが、これ以降、「先生」のKとの暗闘が始まる。そこで注目したいのは、二人の部屋の仕切の襖である。越智治雄が言うように、この襖は「ほとんど象徴の域に近づいている」が、ただし、越智が言うような「自己と他者の間にある」敷居ではなく、「先生」の内面にある心の扉であろう。Kは「先生」にとつての他者というにはあまりに似すぎていて、前述したようにもう一人の自分というべき存在であり、「先生」が自問自答する相手として形象化され、人格化されたものと言える。

ふだんはお互い隣の部屋にいても「居るのだから居ないのだから分らない位静」かだが、Kが告白をする場面では次のように語られる。

十時頃になつて、Kは不意に仕切の襖を開けて私と顔を見合わせました。彼は敷居の上に立つた儘、私に何を考へてゐると聞きました。

「顔を見合わせ」る「先生」とK。Kは「先生」にとつてまさしく合わせ鏡のような存在であり、「何を考へてゐる」という問いかけによつて、「先生」は自分の内面を見詰める。そこでKが語る「御嬢さん」への思いはすなわち「先生」の「御嬢さん」への思いである。しかし「先生」はKに自分の思いを告白することができなかつた。むろん打ち明けるべきだと思ふのだが、時機を失してしまつたという思いに打ち勝てない。

私はKが再び仕切の襖を開けて向ふから突進してきて呉れ、ば好いと思ひました。(中略)それで時々眼を上げて、襖を眺めました。然し其襖は何時迄経つても開きません。さうしてKは永久に静なのです。

其内私の頭は段々此静かさに掻き乱されるやうになつて来ました。Kは今襖の向で何を考へてゐるだらうと思ふと、それが氣になつて堪らないのです。(中略)それでゐて私は此方から進んで襖を開ける事が出来なかつたのです。

この、襖という心の扉を開けて「先生」がKに自由していれば、後の悲劇は起らなかつただろう。しかし「先生」は自由するどころか、Kに進むべきか退くべきか助言を求められて、Kの恋を断念させようという策略から、「精神的に向上心のないものは馬鹿だ」と言い放つ。この言葉は房総旅行の際に、Kが日蓮のことを話しているのを「先生」が真剣に取り合はずにいたことで、Kが「先生」を侮蔑して言つた言葉である。二人が同じ言葉を吐くのは、あたかも木霊が呼び交わすようであるが、Kが文字通りの意味で言つた言葉を、「先生」は相手の弱点を突き、自己の利益を図るために発したのである。

Kは「先生」が心の中に描く理想的な自分の姿だつた。彼は「私より強い決心を有し(中略)勉強も私の倍位はした(中略)其上持つて生れた頭の質が私よりもずっと可よかつた(中略)私には平生から何をしてもKに及ばないといふ自覚があつた」。また、「容貌もKの方が女に好かれるやうに見え(中略)性質も私のやうにこせくしてゐない所が、異性には氣に入るだらうと思はれ(中略)何処か間が抜けてゐて、それで何処かに確しかりした男らしい所のある点も、私よりは優勢に見え」た。

Kは勇氣も度胸もある男だが、「余りに正直で」「余りに単純で」「余りに人格が善良だつた」。そこに「先生」は付け込んだのだが、「先生」がもとからそのように卑怯で残酷なことをする人間だつたわけではない。「先生」自身がKのように「純なる尊い男」であつたために叔父に騙されたのであつた。

私は其時の己れを顧みて、何故もつと人が悪く生れて来なかつたかと思ふと、正直過ぎた自分が口惜しくつて堪りません。然しまた何うかして、もう一度あゝいふ生れたままの姿に立ち帰つて生きて見たいといふ心持も起るのです。記憶して下さい。あなたの知つてゐる私は塵に汚れた後の私です。

正直な、生れたままの自分、それが取りも直さずKであり、Kを欺いたことはすなわち自分を欺いたということである。善良で正直な自分を否定したのである。Kをやり込め勝利の凱歌をあげた「先生」は、穏やかな眠りに落ちるが、そこに再び心の扉である襖が現れる。

突然私の名を呼ぶ声で眼を覚ましました。見ると、間の襖が二尺ばかり開いて、其所にKの黒い影が立つてゐます。

「Kの黒い影」——否定され、やがて死ぬことを予兆するかのような姿である。Kは「もう寝たのか」と聞き、「私は黒い影法師のやうなKに向つて、何か用かと聞き返」す。Kはただ聞いて見ただけだと答える。「Kはやがて開けた襖をびたりと立て切り」、「私の室はすぐ元の暗闇に帰」つた。

その後「先生」はKを出し抜いて「奥さん」に「御嬢さん」との結婚を申し込む。事はうまく運ぶが、この結婚の話を「先生」はやはりKに話せない。「卑怯な私は終に自分で自分をKに説明するのが厭になつたのです。」そしてKの自殺により、「先生」は本来の自分を永久に失つてしまう。Kが自殺した後の場面を見てみよう。

私は枕元から吹き込む寒い風で不図眼を覚したのです。見ると、何時も立て切つてあるKと私の室との仕切の襖が、此間の晩と同じ位開いてゐます。けれども此間のやうに、Kの黒い姿は其所には立つてゐません。

「先生」はKの部屋に入り、向う向きに突つ伏しているKに「おい」と声を掛けるが、何の答えもない。そしてKが永久に答えることもなく、また問いかけることもないことを知って、「もう取り返しが付かないといふ黒い光が、私の未来を貫ぬいて、一瞬間に私の前に横たはる全生涯を物凄く照らしました。」もはや「先生」は心の扉を開けて自分と対話することができなくなつたと悟るのである。自分を死に追いやった「先生」は早晩死ななければならぬ。

エドガー・アラン・ポオの『ウィリアム・ウィルソン』と『こころ』を比較して論じた池田美紀子によれば、「良心」のウィルソンが、最後の悪業を働こうとしたウィルソンに刺されて死ぬときに次のように言う。

君は勝つた、僕は降参する。だがこれからは君はもう死人なのだ。……よく見るがよい、結局、君がいかに自分を殺してしまつたかを。¹⁶

そして「ウィルソンが以後、この世に対し生きる屍となつてしまい、ついに死に至るように、『こころ』の先生は、(中略)以後「死んだ積で生きていかうと決心」するが、どこまでもつきまとうKの黒い影から逃れられず、結局自殺する」のである。¹⁷

「上 先生と私」で「先生」の奥さんは、「私」に「人間は親友を一人亡くした丈で、そんなに変化できるものでせうか」と言うが、「先生」は自分という最高の親友を亡くしたのである。つねに対話をしてきた心の中の自分を亡くしたのである。その点から考えると、Kというイニシャルには心——作品のタイトルでもある——すなわち kokoro の意味が込められていると言える。

以上のような「先生」の遺書は、しかしながら「私」に向けて書かれていることを再確認しておきたい。さらに言えば、「私」の存在なくして遺書は書かれ得なかつたし、また「私」が存在しなければ、「先生」は「死んだ積で生き」続けていたかもしれない。『こころ』はあくまでこの「私」の物語である。「私」が語る「私」と「先生」との物語である。『こころ』は次のような書き出しで始まる。

私は其人を常に先生と呼んでゐた。

この、一見単純な文章の中に、この作品の本質が読み取れる。「私」が「先生」と呼ぶのであつて、誰もが皆「先生」と呼ぶのではない。そして、「私」が「先生」と呼びかけて対話をしていた、ということである。『こころ』は「私」が「先生」と出會つて「先生」が死ぬまでの、「私」と「先生」との対話の記録なのである。

二人の対話は鎌倉の海で始まる。一人の西洋人を連れていた「先生」を初めて見た時に、「私」は「どうも何処かで見たいのある顔の様に思はれてならなかつた。」それで何度か「先生」に近付こうとするが、「物を云ひ掛ける機会も、挨拶をする場合も、二人の間には起らなかつた」上に、「先生の態度は寧ろ非社交的であつた。」

その後ふとしたきつかけで「先生」と口をきくようになるが、「何処かで先生を見たやうに思」い、「何うしても近づかなければ居られないといふ感じ」をもつ私に対し、「先生」は一貫してある種のよそよそしさを持ち続ける。「先生は何時も静で（中略）ある時は静過ぎて淋しい位で（中略）近づき難い不思議があるやう」だった。その不思議は時に「先生」の顔に射す「変な曇り」として現れる。その曇りは雑司が谷の墓地で「私」が「先生」を不意打ちにした時に初めて認められ、墓

参にお供することを「私」が願ひ出た時に再び現れる。

このような「先生」の謎めいた部分を「私」は「研究的に」追窮することではなく、「二人の間を繋ぐ同情の糸」は切れずに、「私」と「先生」の交際は続いていく。「私」が度々「先生」の家を訪れるので、「先生」は「何故さう度々来るのか」と聞く。そして「先生」は「私は淋しい人間です。(中略) ことによると貴方も淋しい人間ぢやないですか」と言う。「私」は否定するが、「先生」は「若いうち程淋しいものではありません。そんなら何故貴方はさう度々私の宅へ来るのですか」と言う。

「先生」と「私」がともに「淋しい人間」であるのは、両者とも田舎から東京へ出てきた「土から離れた人間」¹⁸であることが関わっている。「先生」が故郷と訣別したように、「私」も後に死の床にいる父を見捨てて「先生」のもとに駆けつけることが暗示するように、やがては故郷を捨てることだろう。こうした二人の同質性は、江藤淳が言う「瓜二つの精神的同族」¹⁹をはじめとしてすでに多くの人の指摘するところである。そしてこの同質性を感じていたからこそ、「私」は「先生」に近付いたのである。

言い換えれば、「先生」は「私」にとつての「もう一人の自分」だった。そのような「私」と「先生」との一体感は次のような文章にうかがえる。

先生は、歓楽の交際から出る親しみ以上に、何時か私の頭に影響を与へてゐた。たゞ頭といふのはあまりに冷か過ぎるから、私は胸と云ひ直したい。肉のなかに先生の力が喰ひ込んでゐると云つても、血のなかに先生の命が流れてゐると云つても、其時の私には少しも誇張でないやうに思はれた。

この文章に呼応するように、「先生」もまた遺書の中でこう書き綴る。

私は其時心のうちで、始めて貴方を尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或生きたものを捕まへやうといふ決心を見せたからです。私の心臓を立ち割つて、温かく流れる血潮を啜らうとしたからです。(中略) 私は今自分で自分の心臓を破つて、其血をあなたの顔に浴せかけやうとしてゐるのです。

また「先生」がこの遺書の中で「私」という自称を用いるのも、「先生」と「私」が同一であることの証しである。²⁰

「先生」は「もう一人の私」であつた。「何処かで見えた事のある」ように「私」が思つたのも当然である。しかし同時にこの「もう一人の私」は、「先生」という呼称が示すように、「私」より一世代上の、父親の世代に属している。「私」はこの「私」の人生の先行者²¹の中に、「未来の自分がたどる運命の暗示」²²を感じ取るのである。

他方、「先生」にとつて「私」は失つた自分だつた。こうありたいと願つた、本来の自分であり、Kの蘇りであつた。「先生」は「私」にこう言う。

私は過去の因果で、人を疑りつけてゐる。だから実はあなたも疑つてゐる。然し何うもあなた丈は疑りたくない。あなたは疑るには余りに単純すぎる様だ。私は死ぬ前にたつた一人で好いから、他を信用して死にたいと思つてゐる。あなたは其たつた一人になれますか。

「あなた丈は疑りたくない」——先生」がこのように言うのは、「私」にかつて裏切つたKの姿を認めているからである。実際、「あなたは疑るには余りに単純すぎる」という言葉は、遺書の中でKについて「余りに単純でした」と語る言葉と照応する。

そしてまた、この、引用した「先生」の言葉は「私」が「先生」の不得要領な話に満足できず、「先生」の過去について話してほしいと迫る場面で話されるが、最初「先生」は「私」の要求に、「あなたは大胆だ」と言う。それに対し「私」は「たゞ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたいのです」と言う。「先生」は「あなたは本当に真面目なんですか」と念を押し、先に引用した言葉の後に「あなたは腹の底から真面目ですか」と繰り返す。「私」は「もし私の命が真面目なものなら、私の今いつた事も真面目です」と答える。

「先生」が「私」を「大胆だ」と言った点に関しては、実はKについても同様に、Kが養家にだまって医者道には進まないつもりであることを「先生」が問いただした際に、「大胆な」という形容が使われている。また「真面目」という言葉も、「先生」とKが相前後して東京に出てきて一緒の下宿に入っていた頃を回想するくだりに、こんなふうに語られている。

然し我々は真面目でした。我々は実際偉くなる積でゐたのです。

「先生」も「私」やKと同様に「真面目」だったのである。Kを裏切るまでは。

「先生」は「私」の中にかつての真面目な自分を見出し、過去のすべてを語ることを決意する。「先生」は遺書の最初に次のように書く。

私は（中略）たゞ貴方丈に、私の過去を物語りたいのです。あなたは真面目だから。あなたは真面目に人生そのものから生きた教訓を得たいと云つたから。

こうして「先生」の「私」が「私」に語る話で、「先生」と「私」の長い対話がしめくくられる。

このように『こころ』に描かれたのは、「先生」と「私」という、一見別箇の存在のようでありながら、実は自分ともう一人の自分との間に交わされた、内面の、心の対話である。すなわちモノローグとしてのダイアローグである。

「私」が「先生」と別箇の存在ではない対話者であることについては、佐藤泰正が以下のように述べている。

「私」は先生の告白を成り立たしめる対者としての他者ではありえても、なおその告白自体を全的に相対化し、対象化なしうる——広義における真の他者なりうるものではあるまい²³

続けて佐藤は相対化、対象化に関連して、「先生の告白は「私」という対象の眼によつて常に碎かれ、問われつづけているのか、また「私」自身がその告白によつてどう問われ、また問い返しえているのか」と疑問を呈し、「先生の告白を、その遺書を真に相対化なさんとする作者の視点は、明確に据えられていない」と結論づける²⁴。それはもちろん、『こころ』が「先生」の遺書で終つていて、遺書に対する私の反応や率直な思いが表明されていないこと、その後の、また現在の「私」のありようが書かれていないことが大きく関わっている。

しかし先述したように、『こころ』は自分との対話、心の中の対話を綴つたものである。そしてこの対話は「先生」という対話者がいなくなることで必然的に終らなければならない。

その後「私」が「先生」の遺書についてどのように考え、どのような人生をたどつたかについては、作者は読者に答えを委ねている。読者は、「私」に読まれるために書かれた遺書を読むことで、すでに「私」と同一化している。「私」とは読者にほかならない。『こころ』を読み終えた後に、心の対話——モノローグとしてのダイアローグ——を始めるのは読者なのである。

四

漱石が『こころ』でこのように自分自身と対話をする主人公を描き出したことには、明治二十七年十二月に鎌倉の円覚寺で参禅した体験を含む、彼の禅に対する関心が大きく関わっている。

禅の公案集『無門関』第十二則には、以下のような自分自身と対話をする瑞巖師彦の話が出てくる。

瑞巖の彦和尚は、毎日自分に向かって「おい主人公」と喚びかけ、自分で「はい、はい」と応えられるのであった。「しつかりしなされや」。「はい」。「どんな時も他人に騙されてはなりませんぞ」。「はい、はい」と自問自答されるのが常であった。⁽²⁵⁾

対話の相手としての自分に「主人公」という名をつけていることは興味深い。また「他人に騙されてはなりませんぞ」と瑞巖和尚が自分に言い聞かせているところは、叔父に騙された『こころ』の「先生」のことが連想される。

『無門関』ではこの後に、無門和尚の以下のような批評が続いている。

無門は言う、「瑞巖親爺は自分で自分を買ったたり売ったりして胡散臭い一人芝居をなさったもんだが、一体何が言いたいんだらう。さあ此処だぞ。一人は喚ぶ者、一人は応える者。一人ははつきり目覚めている者、一人は他人に騙されたりはせぬ者。しかしどの一人を肯がってもやはり駄目だ。そうかといって瑞巖和尚の真似をして一人二役でもしたならば、野狐禅もいところだ。⁽²⁶⁾

秋月龍珉によれば、瑞巖和尚が毎日自分で自分自身に「おい主人公」と呼んで「はい」と返事をしていたのは、自己の自覚を促していたということではなく、遊戯三昧（無心で法に遊ぶ境地になりきっていること）であったと解釈される²⁷。しかし無門は、離れようのない主人公をいちいち呼び出して自分で答えるという点にわざとらしさを見て、そこに本当の悟りはないと批判している。これに関連して、瑞巖和尚の話が近世小説の「主人公」の起源であるとする西田耕三は次のように述べている。

瑞巖和尚が（あるいは私たちが）、自分に向かって、「おい主人公」と呼びかける時、人は虚構をとりこんでいる。瑞巖和尚と「主人公」との対話に関する無門のさきの批評は、そのことを感知している。「おい主人公」と呼びかけた瞬間に、人間は「私」と「主人公」に分裂する。禅では、それは回り道にすぎないし、フィクションにすぎない。しかし、この「胡散臭い一人芝居」によって、人は虚構を取り込む。わたしは「主人公」と相対し、私自身と相対する。その地点から、自己イメージ・自己劇化（自己戯化）が始まる。言いかえれば、語る私と語られる私に分岐する。私が、呼びかけ、語りかける者と、呼び出され、語りかけられる者に分岐することは、その分岐が偽りの他者関係を発生させること²⁸によって虚構の始まりなのである。

西田は瑞巖和尚と「主人公」との対話によって発生した虚構が、「私」とそれに寄り添う「もう一人の私」の対話によって構成される近世小説の原型にあると説く。有名な例では、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』があげられる。弥次郎兵衛と喜多八が対話をしながら、東海道・京・大坂と旅をする話である。こうした二人連れの旅の趣向は、漱石の『二百十日』にもうかがえる。圭さんと碌さんが対話をしながら阿蘇山に登るといふ話である。男二人が対話をしながら山登りをするといふのは、『虞美人草』の冒頭にもあって、そこでは甲野と宗近が対話をしながら比叡山に登る。『二百十日』については落語

の影響が指摘されることが多いが、落語はまさに一人二役の、自己劇化・自己戯化の、近世の代表的フィクションである。

西田はさらに論を進めて「私」から分裂した「主人公」が世態風俗の中で客観化され増殖していった結果、伊原西鶴の『好色一代女』のヒロインが誕生したと論じているが、漱石の場合は、圭さんと碌さんの対話や、甲野と宗近の対話を経て、『ころ』の「先生」という主人公に、その最も純粋な形で、「もう一人の私」という「主人公」を結実させたのではないだろうか。

漱石は前述したように、若い時に参禅体験もあつて、自分の心の中の、内的な対話に早くから大きな関心を寄せてきた。いまだ作家として名を成していない、イギリス留学中にも漱石は *Life's Dialogue* (人生の対話) という英詩を創作している。そこでは第一の霊と第二の霊が交互に呼び交わすように、人が生きることについて詠っている。全体で八つのスタンザから成るが、最後のスタンザを見てみよう。

第二の霊

世界は広い、同じくらいに広いのは／そなた自身のものとそなたが呼ぶ精神だ。／自らを治めるすべを身につけよ、／そなただけが主人なのだ。／世界はそなたの中にこそある、／そなたが世界の中に生きるのではない。／それゆえに綱を緬い、織物を織り、存在せよ、／眠り、忘れ、赦すために。⁽²⁹⁾

第一、第二スタンザで人は「人生の綱」(the rope of life)を緬うこと、また、第三、第四スタンザで人は「時の織物」(the web of time)を織ることを詠っており、そのモチーフが最後に再び現れているが、ここで注目したのは、自分の中に、精神(心)という世界があり、自分自身を治める自分という「主人」(master)がいるということである。瑞巖和尚の「主人公」にも通じる「主人」が、もう一人の自分として、心という内面世界に存在しているということである。

そして第三スタンザで第一の霊が「時の織物」について、「まだらの絵の具で人は汚す、／簡素で崇高な布地を、／憎しみの横糸と、愛の縦糸、／天国の彩りと地獄の彩り、／蛇の毒々しさと鳩の柔和さ、／不実なるものの中の天使。」と詠うのは、後年書かれることになる『こころ』の「先生」の「時の織物」を予告しているかのように見えるのである。

注

- (1) 以下『吾輩は猫である』の引用は、『漱石全集』第一巻(岩波書店、一九九三年)に拠る。
- (2) 古閑章「登場人物名称考」『吾輩は猫である』の場合、『漱石作品論集成』第一巻(桜楓社、一九九一年)、一七一頁。
- (3) 古閑章の前掲論文のほかに、越智治雄(猫の笑い、猫の狂気)『漱石私論』角川書店、一九七一年、前田愛(猫の言葉、猫の論理)『作品論 夏目漱石』双文社出版、一九七六年)など。
- (4) 浅野洋「笑われた男」『坊っちゃん』管見『漱石作品論集成』第二巻(桜楓社、一九九〇年)、一三九頁。
- (5) 以下『坊っちゃん』の引用は、『漱石全集』第一巻(岩波書店、一九九四年)に拠る。
- (6) 亀井秀雄「『坊っちゃん』」『おれ』の位置、「おれ」への欲望』『国文学 解釈と教材の研究』第三十七巻五号(學燈社、一九九二年五月)、五一頁。
- (7) 同前。
- (8) 平岡敏夫「『坊っちゃん』試論」小日向の養源寺)『漱石序説』(塙書房、一九七六年)を参照。
- (9) 正宗白鳥『文壇人物評論』(中央公論社、一九三三年)、五〇頁。
- (10) 拙稿「紫の女」『虞美人草』をめぐって』『比較文學研究』第九十一号(東大比較文学学会、二〇〇八年)。
- (11) 押野武志「『静』に声はあるのか」『こころ』における抑圧の構造』『文学』第三巻第四号(岩波書店、一九九二年)。
- (12) Edwin McClellan, *Two Japanese Novelists - Soseki and Toson*, Tuttle Publishing, 2004, p.52.
- (13) 越智治雄「こころ」『漱石作品論集成』第十巻(桜楓社、一九九一年)、八一頁。
- (14) 同前。
- (15) 同右、九一頁。
- (16) 池田美紀子「二人であることの病い」『漱石のこころ』 どう読むか、どう読まれてきたか』(新曜社、一九九二年)、一一二頁。
- (17) 同右、一二二頁。
- (18) 越智治雄、前掲論文、七九頁。
- (19) 江藤淳『増補版 夏目漱石』(勁草書房、一九六五年)、二五八頁。
- (20) 松元寛は「こころ」論「自分の世界」と他人の世界」のはざままで』(『夏目漱石』現代人の原像、新地書房、一九八六年)で、「私」という同じ自称を用いていることに、作者の何らかの意図があるのではないかと述べているが、その意図がまさしく「先生」と「私」の同一性を示すことである。
- (21) 越智治雄、前掲論文、八〇頁。
- (22) 池田美紀子、前掲論文、一一一頁。
- (23) 佐藤泰正「こころ」へ命根を求めて』『漱石作品論集成』第十巻(桜楓社、一九九一年)、一七九頁。
- (24) 同前。

- (25) 『無門関』（西村恵信訳注、岩波文庫、二〇〇四年）、六四頁。
- (26) 同右、六四―六五頁。
- (27) 秋月龍珉『無門関を読む』（講談社学術文庫、二〇〇二年）、一一八頁。
- (28) 西田耕三『主人公の誕生―中世禅から近世小説へ』（ぺりかん社、二〇〇七年）、三五頁。
- (29) 以下「人生の対話」の引用は、『漱石全集』第十三巻（岩波書店、一九九五年）からの拙訳による。